

三浦太智

目 的

スルメイカ、アカイカの分布・回遊、漁況等の調査結果を、漁業関係者に提供し、効率的な操業の一助とし、漁業経営の安定、向上に資する。

材料と方法

1. 学習会の開催

漁業者を対象とした学習会の開催等により、スルメイカ、アカイカに関する前漁期の状況、本県漁期前の情報を発信した。

2. 漁獲動向調査

日本海側は小泊、下前、鰺ヶ沢、深浦の4港、津軽海峡側は大畑港、太平洋側は白糠、八戸の2港をそれぞれの海域の主要港とし、日本海、津軽海峡におけるスルメイカ、太平洋におけるスルメイカおよびアカイカの漁獲量を調べ、経年比較し、動向の変化を把握した。

結 果

1. 学習会の開催

2022年5月に、東通村漁業連合研究会が開催したスルメイカ漁況の見通しに係る研修会に講師として参加し、スルメイカの資源状態や漁況見通しについて情報提供を行った。

2. 漁獲動向調査

(1) 凍結スルメイカ

八戸港における凍結スルメイカの漁獲動向は、1999年漁期から2006年漁期まで横ばいであったが、2007年漁期以降減少に転じ、2019年漁期には1,000トンを下回った。2022年漁期は1,363トンと前年漁期を下回り、極めて低調であった（図1）。

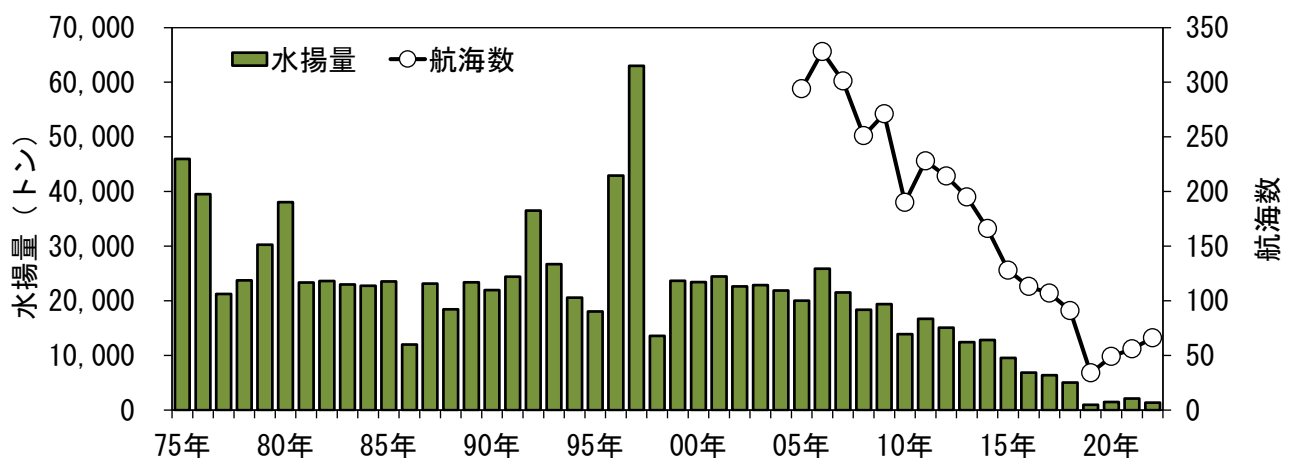


図1. 八戸港における凍結スルメイカ水揚量の推移

(2) 近海スルメイカ

2022年の全海域の合計水揚量は1,203トンで、前年比147 %、近5年平均比71 %であった。

海域別にみると、日本海（小泊・下前・鯨ヶ沢・深浦港）の水揚量は390トンで、前年比110 %、近5年平均106 %であった。津軽海峡（大畑港）の水揚量は59トンで、前年比101 %、近5年平均比39 %であった。太平洋（白糠港）の水揚量は339トンで、前年比191 %、近5年平均比84 %であった。太平洋（八戸港）の水揚量は414トンで、前年比183 %、近5年平均比53 %であった（図2）。

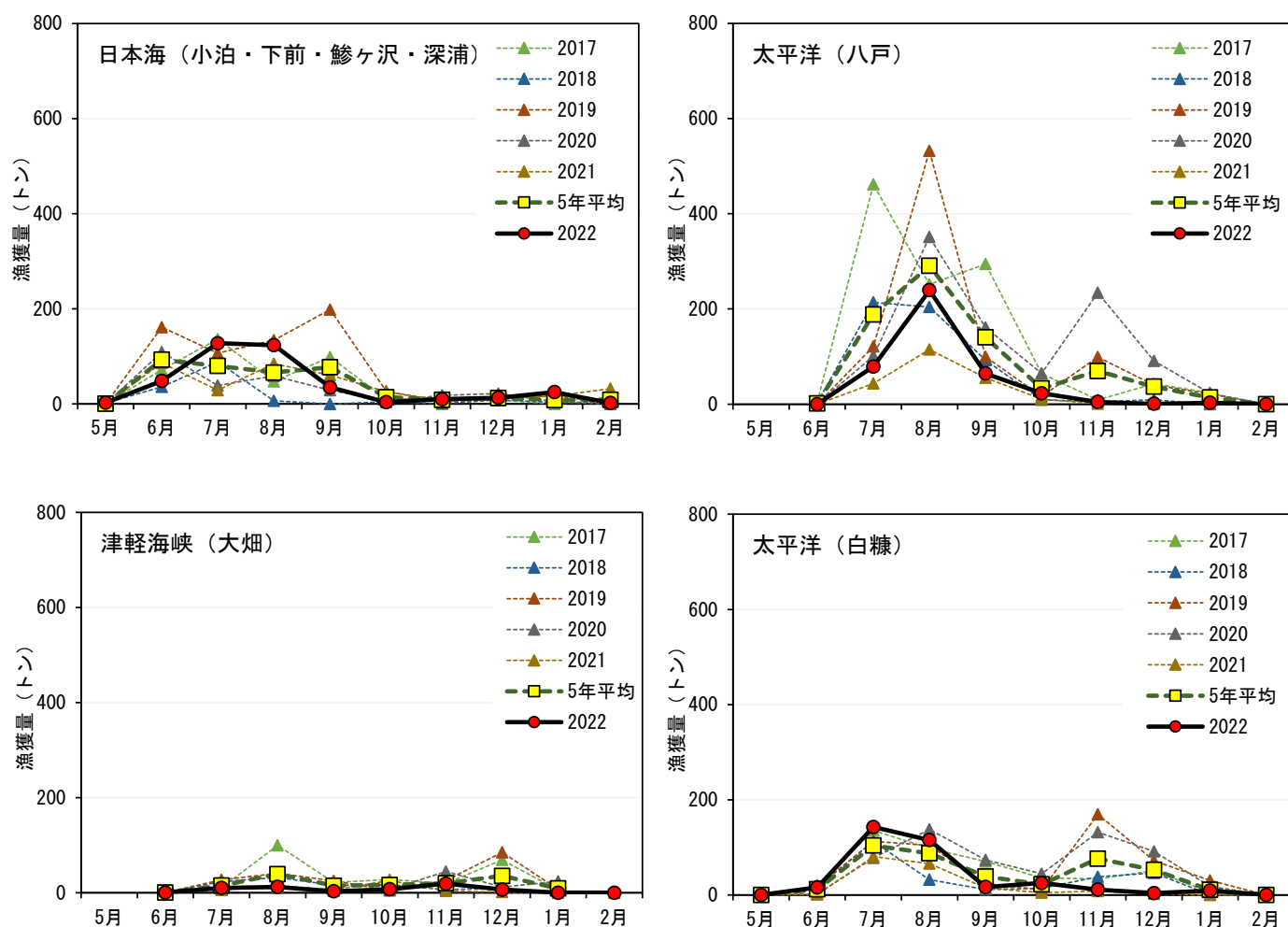


図 2. 県内主要港における近海スルメイカ水揚量の推移（海域別）

(3) 船凍アカイカ

八戸港における船凍アカイカの漁獲は、1970年中盤からのスルメイカ資源の減少により、スルメイカを対象として発展してきたイカ釣り漁業の新たな対象種となったことによって1974年から始まった。1978年からはアカイカを対象とした流網が開発されたことにより、釣りによる漁獲は減少した。1990年には、それまで海外に出漁していた大型イカ釣り漁船が操業したことによって1万トンを超えたものの、それ以外は1980年代中盤から1990年代中盤まで低調に推移した。1992年の公海流網全面禁止以降、釣りによる漁獲は一気に増加したが2000年頃から再び減少し、2010年頃まで2万トン以下で推移した。2011年以降は1万トン以下で推移し、2022年は2,362トンと、前年を下回り、2000年以降で2番目に少ない漁獲となった（図3）。

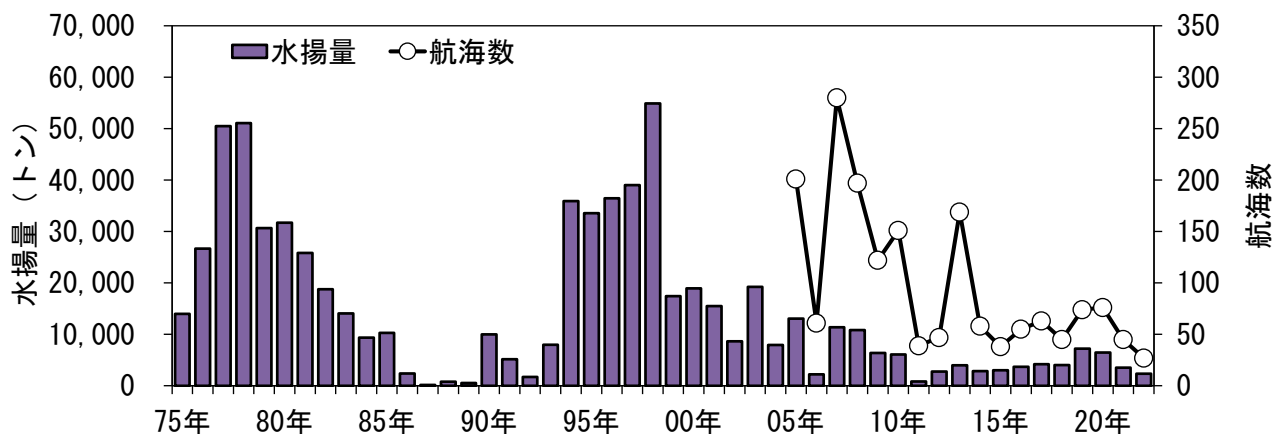


図 3. 八戸港における船凍アカイカ水揚量の推移

八戸港における船凍アカイカの漁期別累積漁獲量を夏漁（北太平洋沖合）と冬漁（三陸沖合）に分けて見ると、2022年漁期の夏漁は2,129トンで、前年比64 %、近5年平均比46 %であった。また、1航海当りの水揚量は96.8トンで、前年比96 %、近5年平均比85 %であった。冬漁は233トンで、前年比112 %、近5年平均比47 %であった。また、1航海当りの水揚量は46.6トンで、前年比269 %、近5年平均比220 %であった（図4）。

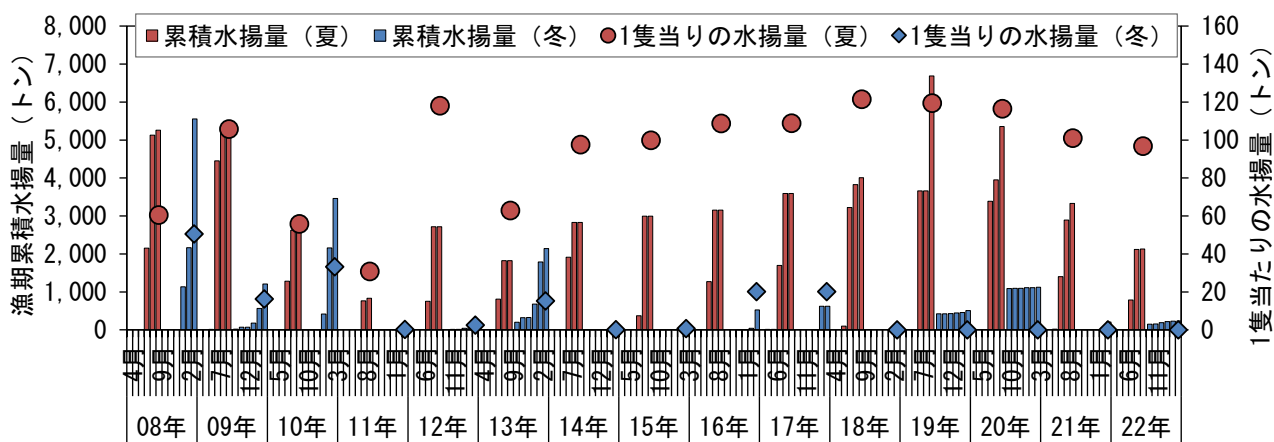


図 4. 八戸港における船凍アカイカの漁期別累積漁獲量の推移